飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

第３回　（通算１０回目記念）
飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会

飼料用米多収日本一表彰式、
飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７

飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７

主催 ： 一般社団法人　日本飼料用米振興協会

後援 ： 農林水産省

飼料用米多収日本一表彰式

共同開催

一般社団法人日本飼料用米振興協会　　農林水産省

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

第一部　シンポジウム　11時00分～12時00分

(1)主催者挨拶　日本飼料用米振興協会　理事長　海老澤 恵子
　連帯の挨拶　日本生活協同組合連合会　総合運営本部　部長
　小熊 竹彦　氏

(2)講演

活動報告「飼料用米における生産コスト低減技術の研究について」
　東京農業大学農学部 助教 有澤 岳 氏

事例報告「飼料用米の保管手段の低コスト化研究報告」
　太陽工業株式会社・物流システムカンパニー　マーケティング室長
　西村 哲 氏

展示、試食、休憩　12時00分～12時50分

第二部　シンポジウム　12時55分～13時40分

(3)講演

基調講演「水田フル活用」
　農林水産省政策統括官穀物課 課長 川合 豊彦 氏

基調講演「飼料用米の利用推進について」
　農林水産省生産局畜産部飼料課 課長 富田 育稔 氏

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

休憩　13時40分～13時55分

「飼料用米多収日本一」表彰式　13時55分～14時50分
表彰式及び農林水産大臣賞受賞者から発表

休憩　14時50分～15時00分

第三部　シンポジウム　15時00分～17時00分

(4)講演
特別講演「飼料用米の生産から畜産への給与、製品の出荷作業」
　株式会社秋川牧園 会長 秋川　実 氏
活動報告「生協における飼料用米利用畜産物の供給活動」
　株式会社パル・ミート(パルシステム生活協同組合連合会)
　　取締役商品本部長 江川　淳 氏
事例報告「飼料用米を利用したSGS生産と活用事例」
　熊本県農業研究センター 畜産研究所 飼料研究室 室長 鶴田 勉　氏
課題提起「飼料メーカーから見た飼料用米普及のための課題」
　昭和産業株式会社 飼料畜産部担当 多田井 友輝 氏
(5)質疑応答
司　会　東京農業大学農学部畜産学科　信岡誠治 教授
(6)閉会挨拶
　一般社団法人日本飼料用米振興協会　副理事長　加藤 好一 氏

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

開　会

総合司会　若狭　良治
日本飼料用米振興協会　理事・事務局長

一般社団法人日本飼料用米振興協会

総合司会　若狭　良治
日本飼料用米振興協会　理事・事務局長

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

農文協

一般社団法人　農山漁村文化協会
が書店を開店しています。
ご利用ください。

一般社団法人日本飼料用米振興協会

ICHIJO HALL
28年度 飼
DVD
飼料米・飼料イネ

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

開会のご挨拶

海老沢　恵子
日本飼料用米振興協会　理事長
（中野区消費者団体連絡会　副会長）

一般社団法人日本飼料用米振興協会

海老沢　恵子　氏
日本飼料用米振興協会　理事長
（中野区消費者団体連絡会　副会長）

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

連帯のご挨拶

日本生活協同組合連合会
総合運営本部
部長　小熊　竹彦

一般社団法人日本飼料用米振興協会

日本生活協同組合連合会
総合運営本部
部長　小熊　竹彦　氏

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

活動報告

飼料用米における
生産コスト低減技術の研究について

東京農業大学農学部
助教　有澤　岳〈農学博士〉

一般社団法人日本飼料用米振興協会

東京農業大学農学部
助教　有澤　岳〈農学博士〉 氏

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

事例報告

飼料用米の保管手段の低コスト化研究報告

太陽工業株式会社・物流システムカンパニー
マーケティング室長　西村　哲

一般社団法人日本飼料用米振興協会

太陽工業株式会社・物流システムカンパニー
マーケティング室長　西村　哲　氏

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

休憩　昼食

５０分間

質問票をお出しください。

一般社団法人日本飼料用米振興協会

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

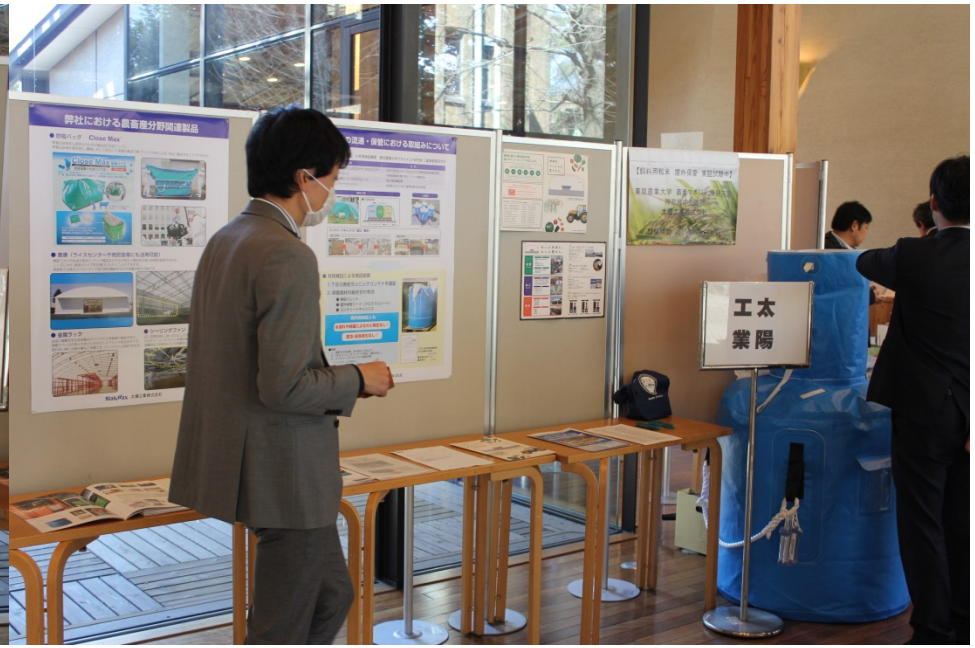
展示・試食会

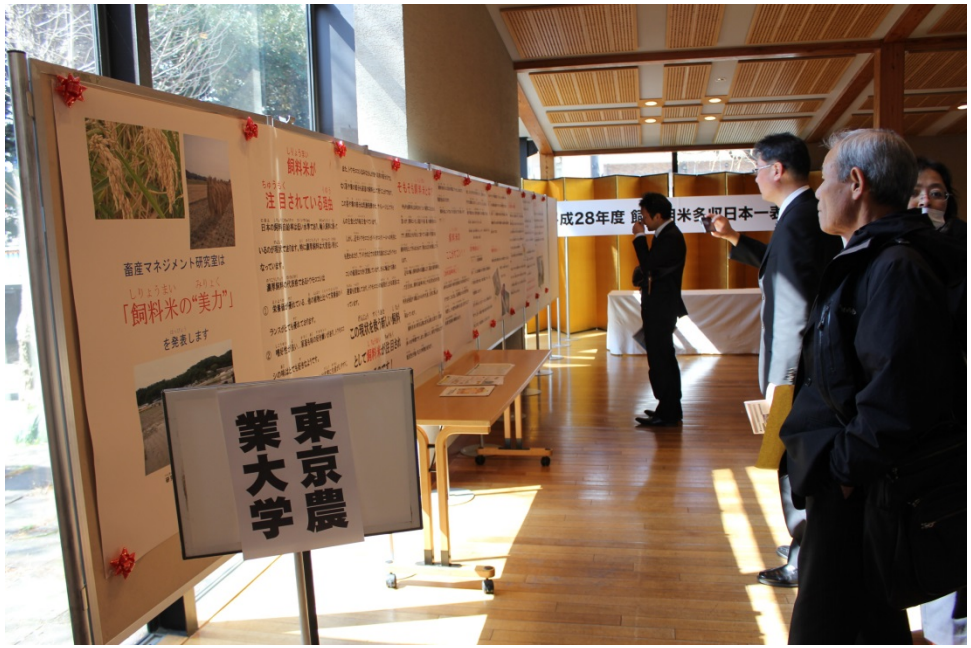
１２：００～１２：５０

試食品の完了で終了

一般社団法人日本飼料用米振興協会

パルシステム
「日本のこめ豚」について
pal*system
http://www.pal.or.jp/
パル・ミート


工太
業陽


畜産マネジメント研究室は
「飼料米の"美力"」
を発表します
東京農業大学

まとめ

昭和 産業 グループ
ヤンマーアグリ

秋川牧園
生活クラブ
秋川牧園
ド化

昭和 産業 グループ
昭和産業グループでは
食料自給率の向上を目指し
飼料用米事業に
取り組んでいます。
和のしずく
国産原料にこだわった卵
昭和産業

飼料用米を食べて育った
おいしいお肉と卵を食卓に！
東京農業大学
ブランド化

飼料用米多収コンテストを開催します。

我こそは日本一！

飼料用米生産農家の生産技術の向上を目指し、多収を実現している先進的で他の模範となる経営体を表彰し、その成果を広く紹介する
「飼料用米多収日本一」
を開催します。

■ 参加できる方

平成２８年産の飼料用米の生産を

- **多収品種（知事特認含む）**で取り組む方
- **生産面積１ｈａ以上**で取り組む方
- **生産コスト低減等**に取り組む方

■ 開催スケジュール

・５月　２日	応募開始
・６月３０日	応募締切
・１月末	確定収量の報告
・翌２月	審査
・翌３月	表彰式（東京都内）

■ 応募先及びお問い合せ窓口

各ブロック事務局へ御相談下さい。
（次ページをご覧下さい。）

【主催】（一社）日本飼料用米振興協会、農林水産省
【後援】ＪＡ全中、ＪＡ全農、 協同組合日本飼料工業会

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

基調講演

水田のフル活用

農林水産省政策統括官　穀物課課
課長　川合　豊彦

一般社団法人日本飼料用米振興協会

農林水産省政策統括官　穀物課課
課長　川合　豊彦　氏

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

基調講演

飼料用米の利用推進について

農林水産省生産局畜産部　飼料課
課長　富田　育稔

一般社団法人日本飼料用米振興協会

農林水産省生産局畜産部　飼料課
課長　富田　育稔　氏

平成２８年度　飼料用米多収日本一表彰式

平成２８年　度飼料用米多収日本一表彰式

ご挨拶（敬称略）

一般社団法人日本飼料用米振興協会　理事長　海老澤　惠子

ご挨拶（敬称略）

農林水産副大臣　磯崎　洋輔

表　彰（授与者）（敬称略）

農林水産大臣賞	農林水産副大臣　磯崎　洋輔
政策統括官賞	農林水産省政策統括官　柄澤　彰
全国農業協同組合中央会会長賞	全国農業用協同組合中央会　常務理事　金井　健
全国農業協同組合連合会会長賞	全国農業協同組合連合会　常務理事　岩城　晴哉
協同組合日本飼料工業会会長賞	協同組合日本飼料工業会　会長　鹿間　千尋
日本農業新聞賞	日本農業新聞　営農生活部長　堀越　智子

受賞者　挨　拶（敬称略）

有限会社　平柳カントリー農産　代表取締役　我孫子　弘美

司　会　農林水産省政策統括官穀物課　課長補佐　小口　悠

（１）　単位収量の部

褒賞	受賞者	ブロック名	都道府県
農林水産大臣賞	有限会社 平柳カントリー農産 代表取締役社長 我孫子 弘美	東北	宮城県
政策統括官賞	新山 実	東北	秋田県
全国農業協同組合中央会会長賞	三日市営農組合 組合長 荒木 嗣正	北陸	富山県
全国農業協同組合連合会会長賞	佐々木 隆	東北	山形県
協同組合日本飼料工業会会長賞	原田 芳和	九州	宮崎県
日本農業新聞賞	地﨑 啓	北陸	富山県

（２）地域の平均単収からの増収の部

褒賞	受賞者	ブロック名	都道府県
農林水産大臣賞	有限会社 平柳カントリー農産 代表取締役社長 我孫子 弘美	東北	宮城県
政策統括官賞	原田 芳和	九州	宮崎県
全国農業協同組合中央会会長賞	地﨑 啓	北陸	富山県
全国農業協同組合連合会会長賞	新山 実	東北	秋田県
協同組合日本飼料工業会会長賞	三日市営農組合 組合長 荒木 嗣正	北陸	富山県
日本農業新聞賞	山田 奈々	近畿	滋賀県

「平成28年度　飼料用米多収日本一」
受賞者の取組概要

【単位収量の部】

農林水産大臣賞	1	有限会社 平柳カントリー農産（宮城県）
政策統括官賞	2	新山　実（秋田県）
全国農業協同組合中央会会長賞	3	三日市営農組合（富山県）
全国農業協同組合連合会会長賞	4	佐々木　隆（山形県）
協同組合日本飼料工業会会長賞	5	原田　芳和（宮崎県）
日本農業新聞賞	6	地﨑　啓（富山県）

【地域の平均単収からの増収の部】

農林水産大臣賞	1	有限会社 平柳カントリー農産（宮城県）
政策統括官賞	5	原田　芳和（宮崎県）
全国農業協同組合中央会会長賞	6	地﨑　啓（富山県）
全国農業協同組合連合会会長賞	2	新山　実（秋田県）
協同組合日本飼料工業会会長賞	3	三日市営農組合（富山県）
日本農業新聞賞	7	山田　奈々（滋賀県）

1 有限会社 平柳カントリー農産（宮城県加美郡加美町）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差（地域の平均単収）
夢あおば	約2.3ha	932kg/10a	387kg/10a（545kg/10a）※

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】
- ○ 昭和50年に平柳営農集団組合を発足させ、地域の7戸の農家で当法人を平成15年に設立。
- ○ 耕種作物のほか、きのこ（えのきだけ）を栽培
- ○ 代表取締役社長：我孫子 弘美
- ○ 構成員［H28］：7名（雇用12名）

【作付品目】
- ・主食用米：ひとめぼれ、金のいぶき等 計5品種　18.3ha
- ・飼料用米：夢あおば　2.3ha
- ・大豆：ミヤギシロメ　18.8ha
- ・種子用：夢あおば、東北211号　4.2ha

※えのきだけを年間510トン栽培

佐々木専務　　我孫子社長

宮城県

【取組のきっかけ】
- ○ 大豆作後の稲の倒伏対策として、平成20年から飼料用米（夢あおば）に取り組む。

【取組概要】
- ○ 大豆作後に飼料用米を作付け、土壌窒素を有効活用。また、牛ふん堆肥（2t/10a）とえのきだけ栽培で発生する廃培土を原料とした堆肥（1t/10a）を施用し、化学合成肥料の使用量を低減。
- ○ 疎植栽培（慣行70株/坪⇒50株/坪）で育苗箱を慣行の30枚/10aから18枚/10aに削減。
- ○ 元肥は、移植時に窒素1.2～1.5kg/10aを側条施肥。追肥はしていない。
- ○ 中干し（6月下旬～7月中旬）完了2日後に溝切りを実施し、用水・排水を円滑化。
- ○ 通水期間の最後（9月中旬）に湛水し、止水することで品種が本来必要な登熟期間を確保し未熟粒発生を低減。
- ○ バラ集荷に対応しているJA加美よつばの飼料用米専用のカントリーエレベーターに乾燥を委託し、全量を2tダンプによるバラ輸送とすることで、包装資材費及び労働費を削減。

2 新山（にいやま） 実（みのる）（秋田県横手市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差（地域の平均単収）
秋田63号	約2.5ha	897kg/10a	284kg/10a（613kg/10a）※

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

○ 家族3人（本人、妻、息子）で経営する専業農家。

○ 大豆を中心とした複合経営

○ 近隣の8農家で「二ツ橋ライスセンター」を設立し、共同で乾燥調製

【作付品目】

・主食用米：あきたこまち、萌みのり　4.1ha

・飼料用米：秋田63号　2.5ha

・大豆：リュウホウ　11.5ha

・小麦+そば（後作）　5.1ha

※水稲、大豆、そばの3年4作の輪作体系

秋田県

【取組のきっかけ】

○ 米価が下落傾向の中、面積拡大に対応した作業体系の確立と経営の安定化を図るため、飼料用米の数量払いが導入されたことを契機に平成26年から多収品種（秋田63号）により飼料用米に取り組む。

【取組概要】

○ 耐倒伏性に優れ、いもち病にも強く、作期が晩生である多収品種の秋田63号を導入し、主食用米（あきたこまち）との作期を分散。

○ 栽植密度は、疎植栽培（株間を広げて栽植密度を下げる）により、慣行の70株/坪から50株/坪に減らし、播種から田植えまでの資材費及び労働費を低減。

○ 追肥は、穂数増加を目的として、窒素成分を多く含んだ肥料の中でも比較的安価な肥料（20kg袋あたり、N4.6kg、K 4.6kg）を7月15日と7月25日にそれぞれ6kg/10a施用。

○ 一台の汎用コンバインで、自らが生産する米、大豆、麦及びそばの収穫を行い、農機具費を低減。

○ 乾燥・調製後は、全てフレキシブルコンテナで、自らJA秋田ふるさとへ全量出荷。包装容器代や運搬経費を節減。

3 三日市（みっかいち）営農組合（富山県高岡市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差（地域の平均単収）
やまだわら	約4.2ha	865kg/10a	273kg/10a（592kg/10a）※

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

○ 高岡市福岡町三日市地区の6戸からなる集落営農組織として平成8年度に設立。

○ 組合長：荒木（あらき） 嗣正（つぐまさ）

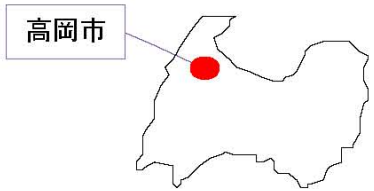
○ 構成員［H28］：6名

【作付品目】

・主食用米：コシヒカリ　10.3ha

・飼料用米：やまだわら　4.2ha

富山県



【取組のきっかけ】

○ 大豆の低単収が課題となっていたことや、地域JAからの勧めがあったことから、平成27年から一部、大豆に代えて飼料用米を作付け。主食用米と同じ機械装備で生産できることや、収量も良かった（27年産：790kg/10a）ことから、28年は本格的に飼料用米に取り組んでいる。

【取組概要】

○ 肥培管理は、主食用米（コシヒカリ）と同様に基肥として肥効調節型肥料（20kg袋あたりN4.2kg、P2.8kg、K2.8kg）を40kg/10a施用し、稲体診断（葉色、草丈等）による適期の追肥（硫安7kg/10a（出穂前））、適切な病害虫防除及び水管理等により高収量を確保。（27年産：790kg/10a、28年産：865kg/10a）。

○ 当該地区は、地力の低い地帯であることから、土づくりとして毎年、鶏糞堆肥及びケイカル（ケイ酸資材）を、慣行の施用目安の1.5倍（150kg/10a（3月下旬～4月上旬））施用。

○ 「やまだわら」が、漏生イネとして主食用米に混入することを防止するため、飼料用米は固定して作付け。

○ ほ場の水管理

入水（代掻き（4月下旬））→湛水管理（田植期（5月上～中旬））→中干し（6月中～下旬）→ 間断かん水 →飽水・湛水管理（幼穂形成期～登熟期）→落水（9月中旬）→収穫（10月上旬）

4 佐々木（ささき） 隆（たかし）（山形県酒田市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差（地域の平均単収）
ふくひびき	約1.0ha	869kg/10a	239kg/10a（630kg/10a）※

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

○ 平成19年に集落営農組織として設立された東平田ファーム（構成員169名）の構成員となり、組織に委託された農地の一部を農業機械オペレーター等として肥培管理を実施。

【作付品目】

- 主食用米：（はえぬき、つや姫、ひとめぼれ） 3.5ha
- 飼料用米：ふくひびき 1.0ha
- 加工用米：はえぬき　ひとめぼれ 1.0ha
- 米粉用米：はえぬき 0.2ha
- 大豆：エンレイ 0.1ha

【取組のきっかけ】

○ 地元JAが、生協や畜産農家等と連携して飼料用米の生産・利用に取り組んでおり、多収品種「ふくひびき」での飼料用米の作付けを推進。JAの勧めに応じて平成27年から飼料用米に取り組む。

【取組概要】

○ 上位3葉の葉長の計が1m以内であれば、太陽光を地面まで届かせることができ、稲の根張りがよく、整粒もみ数の増加（登熟歩合の上昇）が見込めるというこれまでの研究及び経験から、土壌分析データ等を基に基肥の施肥量を調整（10aあたり投入量、N6kg、P6kg、K6kg）。

○ 追肥は、尿素の単肥を使用することで費用を抑え、4kg/10aの施用量を基本として、上記の葉長の管理など生育状況に合わせて施肥量を調整。

○ ほ場は大豆の後作であり均平となっていなかったが、除草剤の効果を確実なものとするため作付前にトラクターダンプで土を移動し、田植え前に追加で代掻きを行うことで、念入りに均平化を図り、除草剤は田植え後の1回のみで確実に効かせることができた。また、殺虫剤・殺菌剤についても、慣行栽培では合計4回散布のところを2回に低減。

5 原田（はらだ） 芳和（よしかず）（宮崎県えびの市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差（地域の平均単収）
ミズホチカラ、ホシアオバ、北陸193号	約1.0ha	890kg/10a	330kg/10a（560kg/10a）※

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】
- ○ 家族経営（本人、妻、子2人）
  農繁期に期間雇用延べ5名
- ○ 収穫作業（10ha）、乾燥・籾摺り作業（120t）を受託

【作付品目】
- ・主食用米：ヒノヒカリ　10ha
- ・飼料用米：ミズホチカラ等　1ha
- ・加工用米：み系358　2ha

※冬作としてイタリアンライグラス2haも栽培

【取組のきっかけ】
- ○ 飼料用米を地域内で生産・利用する循環型サイクルの構築が重要と考え、平成27年から取り組む。

【取組概要】
- ○ 多収を実現するため、特に土づくりに力を入れ、栽培ほ場に豚糞堆肥2～3t/10aを散布。堆肥は、循環型サイクルの一環として、えびの市内の畜産農家からあえて有償で商品（堆肥）として購入（約2,000円/t）することで、良質な堆肥生産と継続的な耕畜連携を実現。
- ○ 化成肥料による基肥（10aあたりN8.4kg、P8.4kg、K8.4kg）と、追肥（10aあたりN2.8kg、P2.8kg、K2.8kg）2回（穂肥（8月）、実肥（9月下旬））を行うことで、多収を実現。
- ○ いもち病抵抗性の品種特性を活かして、防除回数を地域慣行より2回減らし、地域慣行と比べ農薬費約4割削減（実証ほ場の成果）。
- ○ 作期の異なる品種の作付けで、田植えや収穫等の作業を分散。その際、飼料用米は主食用米より先に移植し、最後に収穫することで、品種特性を踏まえた生育期間を確保し、多収を実現。

6 地崎（ぢさき） 啓（けい）（富山県高岡市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差（地域の平均単収）
やまだわら	約2.1ha	882kg/10a	290kg/10a（592kg/10a）※

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

○ 家族経営（常勤：本人、農繁期の期間雇用（両親、姉））

【作付品目】

- 主食用米：コシヒカリ、てんこもり、とみちから 13.0ha
- 飼料用米：やまだわら 2.1ha
- 大豆：エンレイ 5.5ha
- 大麦：ファイバースノウ 2.0ha

富山県

【取組のきっかけ】

○ 2年3作体系（水稲ー大麦ー大豆）を基本としていたが、山際のほ場は重粘土壌のため排水性が悪く、大麦や大豆の栽培には不利であった。このため、平成28年から排水条件の悪い山際のほ場を中心に飼料用米（やまだわら）に取り組む。

【取組概要】

○ 大豆後作のほ場では、土中窒素成分が多くなることから、他のほ場の主食用米及び飼料用米に比べて基肥（20kg袋あたりN4.2kg、P2.8kg、K2.8kg、肥効調節型肥料）を2割削減（21kg/10a⇒17kg/10a）。

○ 除草剤は、主食用米の慣行栽培より1回減らし、初期・中期除草剤田植え同時処理のみとしている。

○ 生産コスト低減に取り組む一方で、飼料用米であっても良質なものを生産したいとの強い意志から、主食用米と同様に土壌改良資材として発酵鶏糞（100kg/10a（3月下旬～4月上旬））の施用、稲体診断（葉色、草丈等）による適期の追肥（硫安10kg/10aを2回に分けて施用（出穂前））、適切な病害虫防除及び水管理等により高収量と同時に品質を確保。

○ ほ場の水管理

入水（代掻き（4月下旬））→湛水管理（田植期（5月上～中旬））→中干し（6月中～下旬）→ 間断かん水 →飽水・湛水管理（幼穂形成期～登熟期）→落水（9月中旬）→収穫（10月上旬）

7 山田（やまだ） 奈々（なな）（滋賀県東近江市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差（地域の平均単収）
北陸193号	約2.4ha	823kg/10a	272kg/10a（551kg/10a）※

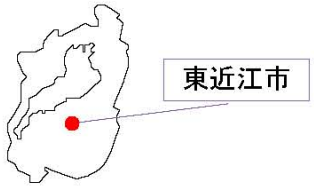
※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】
- ○ 家族4人（本人、夫、両親）で農業を経営する兼業農家。
- ○ 水稲専作で、経営面積約5ha

【作付品目】
- ・主食用米：夢ごこち、滋賀羽二重糯（しがはぶたえもち） 2.5ha
- ・飼料用米：北陸193号 2.4ha

【取組のきっかけ】
- ○ 小規模集落で離農者が増える中、不作付地解消及び収益増加のため、借地を含む農地において、平成26年産から主食用品種（日本晴）で飼料用米に取り組む。
- ○ 平成27年産から、出荷先の商系事業者（米・資材卸）の薦めもあり、倒伏に強く、多収である北陸193号の栽培に取り組む。

滋賀県



【取組概要】
- ○ 北陸193号は主食用米より早く定植し、主食用より遅く収穫することで、品種特性を踏まえた十分な生育期間を確保し未熟粒を減らして収量を増加。
- ○ 施肥は元肥として窒素分30%の緩効性肥料を田植と同時（５月３～５日）に53～55kg/10a施用し、幼穂形成期の少し前（7月13～16日）に追肥することで株の根張りを向上。追肥の施肥量は、過去の施肥量と収穫状況を分析・参考とし、ほ場ごとに調整のうえ、安価な単肥（硫安）をほ場ごとに5～15kg/10a施用。
- ○ ６月中旬に確実な水切り作業を行い、最高分けつ期の直前に十分な落水を行い、倒伏防止及び根の活性化を図った。
- ○ 育苗は簡易水槽を使い、プール育苗を行うことで、労働時間を低減。
- ○ 防除は省力化のため、育苗箱施用と除草剤の田植7日後散布の2回に削減。
- ○ 収穫後１週間以内にもみがらを散布し、わらと併せてすき込み、12月末までに再度のすき込みを行うことで良質な土づくりを実施。

表彰状授与者の皆様

農林水産副大臣　礒崎　洋輔　様
農林水産省政策統括官　柄澤　彰　様
協同組合日本飼料工業会　会長　鹿間　千尋　様
全国農業用協同組合中央会　常務理事　金井　健　様
日本農業新聞　営農生活部長　堀越　智子　様
全国農業協同組合連合会　常務理事　岩城　晴哉　様　　（右から）

副賞　盾」（盾：光学ガラス、台座：御影石製）

平成28年度 飼料用米多収日本一表彰式

表彰式　司会　小口　悠　氏
農林水産省　課長補佐

一般社団法人日本飼料用米振興協会　理事長　海老澤　恵子　氏

農林水産副大臣　礒崎　洋輔　氏

農林水産大臣賞　２部門受賞
単位数量部門、地域平均単収増収部門

左から　代表取締役、佐々木専務取締役、我孫子平柳カントリー農産、礒崎農林水産副大臣

農林水産省政策統括官賞を読み上げる
農林水産副大臣　政策統括官　柄澤　彰　氏

ご夫妻と柄澤農水省政策統括官

左から　　新山　幸子、新山　実　ご夫妻と岩城全農常務理事

原田親子と柄澤農水省政策統括官

左から　原田直史（子息）、原田芳和（受賞者）、鹿間協同組合日本飼料工業会会長

荒木三日市営農組合組合長と鹿間協同組合日本飼料工業会会長

荒木三日市営農組合組合長と金井全国農業協同組合中央会常務理事

地﨑　啓さんと金井全国農業協同組合中央会常務理事

地﨑　啓さんと堀越日本農業新聞営農生活部長

左から　　山田奈々さんの旦那さんとお父様、堀越日本農業新聞営農生活部長

佐々木　隆さんと岩城全国農業協同組合連合会常務理事

新山ご夫妻さんと岩城全国農業協同組合連合会常務理事

新山　実さんと岩城全国農業協同組合連合会常務理事

平成28年度 飼料用米多収日本一表彰式

平成28年度 飼料用米多収日本一表彰式

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

特別講演

飼料用米の生産から
畜産への給与、製品の出荷作業

株式会社秋川牧園
代表取締役　秋川　実

一般社団法人日本飼料用米振興協会

株式会社　秋川牧園
代表取締役　秋川　実　氏

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

活動報告

生協における
飼料用米利用畜産物の供給活動

株式会社パル・ミート
（パルシステム生活協同組合連合会）
取締役・商品本部長　江川　淳

一般社団法人日本飼料用米振興協会

株式会社パル・ミート
（パルシステム生活協同組合連合会）
取締役・商品本部長　江川　淳　氏

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

研究報告

籾米サイレージ（ＳＧＳ）生産と利用体系の確立に向けた取り組みについて

熊本県農業研究センター
畜産研究所　飼料研究室
室長　　鶴田　勉

一般社団法人日本飼料用米振興協会

熊本県農業研究センター
畜産研究所　飼料研究室
室長　　鶴田　勉　氏

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

課題提起

飼料メーカーから見た
飼料用米普及のための課題

昭和産業株式会社
飼料畜産部　担当　多田井　友揮

一般社団法人日本飼料用米振興協会

昭和産業株式会社
飼料畜産部　担当　多田井　友揮　氏

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

質疑・応答

信岡誠治
東京農業大学農学部　教授（農学博士）
日本飼料用米振興協会　理事

一般社団法人日本飼料用米振興協会

質疑応答の進行役を務める　信岡誠治　氏
東京農業大学農学部　教授（農学博士）
日本飼料用米振興協会　理事

料用米を活かす日本型備蓄
料用米普及のためのシンポジウム2017
質疑・応答
信岡誠治
京農業大学農学部　教授（農学博士）
日本飼料用米振興協会　理事
一般社団法人日本飼料用米振興協会

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１６～

閉会のご挨拶

加藤　好一

日本飼料用米振興協会　副理事長
生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　会長

一般社団法人日本飼料用米振興協会

閉会の挨拶　加藤　好一　氏
日本飼料用米振興協会　副理事長
生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　会長

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１７～

お疲れ様でした

交流懇親会をシンポジウム終了後に

農学３号館地下

東京大学消費生協食堂

で開催いたします。参加は受付で

お申し込みください。

一般社団法人日本飼料用米振興協会

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１６～

お疲れ様でした。

アンケートをお願いします。

交流懇親会もよろしく

一般社団法人日本飼料用米振興協会

飼料用米を活かす日本型循環畜産推進交流集会
～飼料用米普及のためのシンポジウム２０１６～

お疲れ様でした。

交流懇親会に参加の方は、
農学３号館地下
東京大学消費生活協同組合食堂
に移動をお願いします。

情報交流懇親会は、４０名の参加者でにぎわいました。最後まで残った方々で記念撮影をしてお開きとなりました。

情報交流懇親会は、４０名の参加者でにぎわいました。最後まで残った方々で記念撮影をしてお開きとなりました。